

「タイトル」(作品名)

「影武者一代記」

江連泰知

あらずじ

安土桃山時代、甲武家という架空の武家に属する者達を描いた物語。主人公の父、霧生景頼は主君たる甲武虎信に謀反を起こすものの敗北、自刃する。虎信は主人公・霧生景時（幼名・竹丸）を捕らえ、謀反人の子として死罪を言い渡そうとしていた。しかし、虎信の嫡子・甲武雅信は景時の助命を願った。景時は雅信に命を救われたことと、その際雅信から弟と呼ばれた感動に涙した。四年後、景時は雅信の影武者となっていた。景時は病床の虎信から、東海地方の有力大名・尾川元長の城へ行けと命じられる。尾川は甲武との政略結婚を呑む条件として、新郎たる雅信が直接挨拶に来ることを要求していたのである。そこで虎信は景時を装させ、雅信の代わりに尾川の城へ行かせようと考えたのであった。雅信を守るため、景時はその任務を引き受ける。

尾川の城に着いた景時は、雅信の婚約者である勝子から「わらは誰の妻になりませぬ」と告げられ、困惑する。その夜、景時は勝子の侍女・お鈴から勝子が婚礼を拒む理由を聞かされる。勝子は尾川の実の娘ではなく、本当の父親は尾川との戦に敗北して死亡、母親は勝子を守るため尾川の側室となる道を選んだという。翌日、景時は勝子に対し、勝子が意地を張ることで周囲の者に迷惑がかかると諫める。しかし、尾川への復讐を望む勝子は反発し、雨の降る中庭に飛び出してしまふ。景時は咄嗟にそれを追うも、それにより雨で変装が解け、影武者であることがばれてしまふ。そこで景時は敢えて甲武側の狙いを告白し、甲武家の妻として尾川に復讐する道を示唆する。その説得に心を動かされた勝子は結婚を承諾するも、同時に景時と勝子は本心を打ち明け合った連帯感も手伝い、互いに惹かれ合い始めていた。

その後、景時は甲武家の城に戻り、婚礼の日を迎える。景時は勝子を婚礼の場に案内するが、その途中、勝子から「わらわを雅

信様の妻にすることがそちの本望か？」と問われる。あくまでも忠義を貫こうとする景時はそれに同意するも、後に一人涙を流す。その後、虎信を病で失った甲武家に、尾川が挙兵したという報告が入る。そこで雅信は籠城戦で尾川を迎え撃つことを宣言した。しかし、最新式の火縄銃を装備した尾川軍に甲武軍は押され、出陣した景時も負傷して三日間寝込むこととなる。

景時が目覚めた時、雅信は尾川への人質として勝子を幽閉し、尾川の進軍を止めるという暴挙に出ていた。景時は、病身の勝子は幽閉生活に耐えられないと考え、主君に背いて勝子を救い出すことを決意・実行するが、計画は露見し、囚われの身となる。

景時は、勝算のない戦のために勝子を犠牲にしようとしている雅信を諫める。すると雅信は、父親からは優しすぎるが故に武士に相応しくないと失望され、勝子の心も景時に奪われた自分には天下統一しか残されていないと涙ながらに主張する。

そこへ、尾川の勢力が進軍を再開したと報告が入る。絶望に崩れ落ちる雅信の前に、景時は雅信の影武者として敢えて尾川に討たれることで雅信と勝子が落ち延びる時間を稼ぐという策を提案する。それを聞いた雅信は景時に、今の自分に命を捨てる価値があるのか、と問う。景時は、価値のあるなしではなく、兄のように慕う雅信のためだから命を捨てられるのだと語る。雅信は景時からこのような無条件の肯定を得られたことで憑き物が落ちる。雅信は景時に対し、自分が時間稼ぎを務めて死ぬという決意を表明し、今後は景時が甲武雅信を名乗れと命じた。葛藤の末、景時は雅信の最後の命令を受け入れる。その後、雅信は尾川に立ち向かい、景時と勝子が落ち延びる時間を稼いだ代償に命を落とす。四十年後、勝子は息子・雅時と共に雅信の墓に赴き、景時の遺言に従ってその喉仏の骨を墓前に供えた。四十年の時を経て再会した二人に思いを馳せ、勝子は雅時と共に城へ帰っていく。

人物関係図

霧生景時	(12)	(16)	影武者	
甲武雅信	(14)	(18)	大名家の跡取り	
勝子	(7)	(19)	(59)	大名家の姫君
甲武虎信	(53)	(57)	雅信の父	
尾川元長	(31)	(43)	大名	
霧生景頼	(32)	虎信の影武者		
山城勘二郎	(44)	(48)	虎信の家臣	
秋馬春友	(56)	(60)	虎信の家臣	
お鈴	(10)	勝子の侍女		
甲武雅時	(33)	景時の息子		
勝子の母				
見張り				
伝令				

1〇 裏見川・河川敷（朝）

武装した霧生影頼（32）が砂利の上に座っている。景頼の兜には二本の角が生えているが、うち一本が折れている。景頼の側には涙を流す武者が控えている。景頼、小刀を取り出す。景頼、震えながら息を吸い込んだ後、切腹する。鮮血が砂利を濡らす。

2〇 漆襲城・広間・内（夕）

甲武虎信（53）が着座の間に座っている。山城勘二郎（44）と秋馬春友（56）を含む家臣団が虎信の前に控えている。

伝令「霧生景頼、自刃！」

虎信、頷く。

虎信「左様か」

山城「謀反人には相応しき末路ですな」

秋馬、咳払いする。

秋馬「して御屋形様」

虎信、秋馬を見る。

秋馬「あの者の処分はいかがいたしましたしょう」

虎信「あの者？」

秋馬「はっ」

秋馬、頷く。

秋馬「霧生めの倅にございます」

虎信、眉根を上げる。

3〇 同・双葉の館・内

霧生景時（12）が横たわっている。景時の頬は

こけている。

山城の声「死罪にすべきです」

景時、ギョツと目を閉じる。

4〇 同・広間・内（夕）

虎信が着座の間に座っており、山城と秋馬を含む家臣団が虎信の前に控えている。

山城「謀反人の子にごさいますれば、それが筋というもの」

秋馬「しかしのう」

山城「何か？」

秋馬「まだ元服もしておらぬ童ぞ」

山城「それは」

秋馬「此度の件も何も知らされておらぬと聞く」

山城「偽りやもしれませぬぞ」

秋馬「だとしてもじゃ。精々仏門にでも」

虎信「腹を切らせよ」

一同、虎信を見る。

虎信「いずれ長ずれば、父親の復讐を望むやもしれぬ」

虎信、拳を握る。

5〇 同・双葉の館・内（夕）

頬のこけた景時が横たわっている。

虎信の声「甲武に、儂と雅信に弓引く者があつてはならぬのだ」

部屋の隅にある隠し扉が開き、甲武雅信（14）が入ってくる。景時、体を起こし、身構える。

景時「（かすれた声で）若」

雅信「すまぬな、見張りの目を掻い潜るのに手間取った」

雅信、隠し扉の外から握り飯を取り出す。景時、

はつと目を見開く。

景時「何故、ここに」

雅信「腹が減っておろう？」

雅信、握り飯を景時に差し出す。

雅信「食え」

景時、咄嗟に身を引く。

景時「しかし、拙者は謀反人の」

雅信、首を振る。

雅信「その前に、我が乳兄弟じゃ。食え」

景時、雅信から握り飯を受け取って貪り食う。雅信、何度も頷く。部屋の正式な戸が開き、虎信と秋馬が現れる。虎信、険しい表情になる。

虎信「何をしておる、雅信」

景時、悲鳴を上げて震えだす。雅信、虎信を振り返る。

雅信「父上」

虎信「その者の処分が決まった」

雅信「処分？」

虎信「腹を切らせる。そこを退け」

雅信、震えながらも景時を庇うように手を広げる。

虎信「何のつもりだ」

雅信「竹丸は、我が乳兄弟にございます」

虎信「だが謀反人の子ぞ」

景時、ビクンと震える。

雅信「それでも、私の弟です！」

虎信「雅信！」

虎信、刀に手を掛ける。雅信、景時を抱きしめる。

雅信「竹丸を斬るなら、まず私から斬られませ！」

雅信、震えている。景時の震えが止まり、涙を流す。夕日が部屋に差し込み、雅信と景時の影が重なる。

6〇 同・外（朝）

景時（16）が開け放たれた戸越しに館の中を見つめている。景時、パンと自分の両頬を叩く。

7〇 同・渡り廊下（朝）

景時が渡り廊下を歩いている。廊下から見える中庭には池を中心に石が配置されている。景時が曲がり角に差し掛かると、その先で山城（48）と秋馬（60）がひそひそと話している。

秋馬「左様な大役を霧生に？」

景時、曲がり角の壁に身を寄せる。山城、秋馬に向かって頷く。

山城「然り」

秋馬「御屋形様まで、あやつを信頼しすぎではないか」

山城「若の甘さが移ったのやもしれぬな」

景時、歯噛みするとその場で足音を立てる。山城と秋馬、曲がり角の方を見る。景時、曲がり角を曲がって山城らの前に姿を現す。景時、山城らに会釈する。山城ら、会釈を返して去っていく。景時、鼻を鳴らして再び歩き出す。

8〇 同・虎信の部屋・外（朝）

景時が襖の前に立っている。

景時「霧生景時、只今参上つかまつりました」

雅信の声「入るがよい」

景時、襖を開ける。

90 同・内（朝）

やつれた虎信（57）が布団に横になつており、その脇に雅信（18）が座っている。景時が襖を開けて入ってくる。景時、二人に向かってお辞儀する。

虎信「そこへ」

雅信、自分の隣、虎信の頭に遠い方の床をポンポンと叩く。

景時「はっ」

景時、雅信が叩いたところに座る。虎信、二人をじつと見る。

虎信「こうして並ぶとまことの兄弟のようじゃな」

景時「恐悦にございます」

雅信「乳兄弟にございます故」

虎信「そうじゃな」

虎信、頷く。

虎信「景時よ」

景時「はっ」

虎信「此度の用は他でもない、縁談の事じゃ」

景時「若と尾川の？」

虎信、頷く。

100 有州城・大広間・内（朝）

尾川元長（43）が着座の間に座っており、何人もの武将がその前に控えている。武将ら、一斉に

頭を下げる。

虎信の声「東海を統べる尾川と和平を結べば、上洛に、天下統一にまた一步近づけよう」

尾川、ニヤリと笑う。

110 漆襲城・虎信の部屋・内(朝)

やつれた虎信が布団に横になっており、その脇に頭に近い方から雅信、景時の順に座っている。

景時「御屋形様の積年の夢が叶いますな」

虎信、溜息をつく。

虎信「だが、あの若造め」

景時「尾川が、何か？」

虎信「婚礼の前に、雅信の顔が見たいなどと申しおった」

景時「顔？」

虎信「彼奴の城に来いということぞ」

景時「なんと」

景時、拳を握る。

景時「無礼な」

虎信、自嘲気味に笑う。

虎信「儂も舐められたものよのう」

景時「御屋形様」

虎信「されど、みすみす雅信を参らせるわけには」

雅信「父上」

景時と虎信、雅信を見る。

雅信「やはり、やめましょう」

虎信「何を申すか」

雅信「危険すぎます」

景時、首を傾げる。

虎信 「ならばそなたが行くと申すか」

雅信 「はい」

虎信 「愚かなことを申すな。そなたは甲武の明日を背負う者ぞ」

景時 「若、一体何を」

虎信 「景時よ」

景時 「はっ」

虎信 「雅信に代わり、そなたが尾川の城へ参れ」

雅信、俯く。

景時 「左様な」

景時、唾を飲み込む。

景時 「ことでございしましたか」

虎信 「雅信を彼奴の好きにさせるわけにはいかぬ」

雅信、景時を見つめる。景時、雅信を見つめ返し、

頷くと虎信に向き直る。

景時 「承知つかまつりました」

虎信 「おお」

景時 「若に禍が降りかからぬよう、身代わりになることこそ」

景時、小さく深呼吸する。

景時 「影武者としての務めにございますれば」

虎信 「うむ」

虎信、溜息をついて頷く。雅信、拳を胸にあてて

俯く。

120 同・景時の部屋・内

景時が化粧台の前に座って化粧をしている。化粧
が終わると景時の顔が雅信と瓜二つになる。

130 同・外観

黒を基調とする質素な城が山々に囲まれている。辺りには霧が立ち込めている。

140 同・門前・外

雅信が小姓と共に立っている。馬に乗った景時とその部下達がやって来る。景時、雅信を見て目を見開く。

景時「若！」

景時、慌てて馬から降りる。雅信、景時に近づいていく。雅信、景時の顔をまじまじと見る。

雅信「つくづく、そなたの術には驚かされるな」

景時「影武者の心得にございますれば」

雅信「すまぬな」

景時「何を仰せです」

雅信「私の身代わりになど」

景時「当然のことです。若は甲武の跡継ぎなのですから」

雅信、俯く。

景時「では、これにて」

景時、お辞儀して雅信に背を向ける。

雅信「景時！」

景時、振り返る。

景時「はっ」

雅信「息災でな」

景時「はっ！」

景時、馬に乗って城の外へ向かっていく。雅信、その背を目で追いつける。

150 有洲城・外観

赤や金を基調とする派手な城。

160 同・大広間・内

尾川が着座の間に座っている。その正面に雅信と瓜二つの顔をした景時が平伏している。

尾川 「見事な酒肴であった」

景時 「お褒めの言葉、ありがたく存じます」

尾川 「甲武殿と縁者にならんこと、改めて嬉しく思う」

景時 「私も、そして父も同じ思いにございます」

尾川、頷く。

尾川 「長旅で疲れたであろう、ゆるりと休んでゆかれよ」

景時 「はっ」

景時、平伏する。

170 同・中庭（夕）

池を中心に石が配置された城内の庭。石と池の配置は漆襲城の中庭と似ている。雅信と瓜二つの顔をした景時が池の畔で夕日を眺めている。

勝子の声 「何奴じゃ？」

景時が振り返ると木々の間から勝子（19）が出てくる。

景時 「あなたは」

景時、はっと口を開ける。

景時 「勝子殿、ですか？」

勝子、頷く。景時、自分の胸に手を当てる。

景時 「甲武雅信と申します」

勝子 「そち、いえ、あなたが？」

景時「はっ」

勝子「ふーん」

景時「思わぬところでお目にかかりましたな」

勝子「ええ」

景時、咳払いする。

景時「祝言の暁には、夫婦としてどうぞ末永く」

勝子「お断りです」

景時「はっ!?!」

勝子「わらわは誰の妻にもなりませぬ」

景時、苦笑いする。

景時「ご、ご冗談を」

勝子「あの男の道具になるなど、ごめんです」

景時「あの男?」

勝子、俯いて歯ぎしりする。景時、首を傾げる。

お鈴の声「姫様!」

景時と勝子が振り向くと、お鈴(10)が城内の

方から走ってきている。

お鈴「またここにおられましたか!」

お鈴、景時を見る。

お鈴「あなた様は?」

景時「甲武雅信と申す」

お鈴、あっと声を挙げ、景時と勝子を交互に見る。

お鈴「姫様!何か失礼なことを申されておりませんよね?」

勝子「うむ」

お鈴、胸を撫でおろして溜息をつく。

お鈴「良かった。将来の旦那様に何かあっては」

勝子「いや、先ほどこの方の妻にはならぬと申したところじゃ」

お鈴「え」

お鈴、景時を見る。景時、苦笑いする。

お鈴「たたたたた大変申し訳ございませぬ！」

勝子「お鈴」

お鈴「後程謝罪に参ります故、ここはご勘弁を！」

お鈴、何度も景時に頭を下げる。

お鈴「姫様！参りますよ！」

お鈴、勝子の袖を引っ張って城内に連れていく。

景時、呆然とそれを見送る。

180 同・萩の館・内（夜）

景時が文机の前に座り、手紙を書いている。障子にお鈴の影が映る。部屋には衝立が置いてある他、布団が敷かれており、文机の脇に明かりがある。

お鈴の声「甲武様」

景時、顔を上げる。

景時「どなたでしょう」

お鈴の声「お鈴と申します。姫様のお付きの」

景時「あの時の」

お鈴の声「お話ししたき儀がございまして」

景時「む、しばし待たれよ」

景時、部屋内を見渡し、衝立を見つける。景時、衝立を文机の横に置く。

景時「入るがよい」

障子を開けてお鈴が入ってくる。景時とお鈴の間に衝立がある。

景時「すまぬが、そこから話してもらおうぞ」

お鈴「はい。かしこまりました」

景時「して、話とはなんじゃ」

お鈴 「姫様のことにございます」

景時 「ああ」

景時、苦笑いする。

景時 「そなたも苦勞しておるなあ」

お鈴 「いえ、私など。むしろ」

景時 「なんだ？」

お鈴 「姫様の方が」

景時 「勝子殿が？そうは見えぬが」

お鈴、首を振る。

お鈴 「姫様は尾川の出ではないのです」

景時 「何？」

お鈴 「姫様の本当の御父上は齋藤龍政というお方です」

景時 「聞いたことがある。しかし、齋藤家は」

お鈴 「御屋形様、尾川元長様に滅ぼされました」

景時、息を呑む。

190 (回想) 浅海城・外観 (夜)

湖の畔にある城が燃えている。

200 (回想) 琵琶湖・尾川の陣・内 (夜)

勝子 (7) が母親に抱かれながら泣いている。勝

子の母の視線の先には燃える浅海城がある。勝子

と母の下に武装した尾川 (31) が歩いてくる。

お鈴の声 「姫様の御母上は、御屋形様の妻になることで姫様の命
をお守りしたそうです」

勝子の母、勝子を一層強く抱く。

210 有洲城・萩の館・内（夜）

景時が手紙の置かれた文机の前に座っている。景時から衝立を隔てた向かい側にお鈴が座っている。部屋には布団が敷かれており、文机の脇に明かりがある。

景時 「なるほど、それでか」

お鈴 「はい？」

景時 「あの男とは尾川殿のことであつたのだな」

お鈴 「姫様がそうおっしゃったのですか？」

景時 「ああ」

お鈴、額をピシヤリと叩く。

お鈴 「おやめくさいと申しておりますのに」

景時、筆で自分の頭をコツコツと叩いている。

お鈴 「それで、姫様のことですが」

景時 「ん？ああ」

お鈴 「本日のご無礼、大変申し訳ございませんでした。しかし」

景時 「しかし？」

お鈴 「姫様のお辛い気持ちも知っていただきたいのです」

景時、ふつと笑う。

景時 「そなたは忠義者だな」

お鈴 「そ、そんなことは」

景時 「安心せい。ようわかった」

お鈴、両手を握り合わせる。

お鈴 「ありがとうございます！」

景時 「今日はもう寝るとよい」

お鈴 「はい！」

お鈴、部屋を去る。景時、手紙を畳み、明かりを消す。景時、布団に入り、天井を見つめる。景時、

パンと両頬を叩いた後、目を閉じる。

220 同・渡り廊下

雨が降っている。中庭が見える渡り廊下。勝子が中庭をじっと見ながら立っている。その背後から雅信と瓜二つの顔をした景時が近付いている。景時は袖を盾にして雨粒が顔にかからないようにしている。勝子、振り返る。

勝子「おや？まだ帰っておられなかったのですか」

景時「この雨では危のうございます故」

勝子、中庭の方へ向き直る。景時、その隣に立つ。

景時「不思議なものです」

景時、勝子を横目で見る。勝子、中庭から視線を外さない。

景時「我が居城の庭園と池や石の位置がよう似ている。これは」

勝子「おやめください」

景時「はい？」

勝子「機嫌取りのおつもりですか？」

景時「いえ、左様なことは」

勝子「わらわの気持ちは変わりませぬ」

勝子、景時に向き直る。

勝子「妻にはなりませぬ」

景時、溜息をつく。

景時「それが通るとまことお思いですか」

勝子「え」

景時「勝子様の気持ち一つで動く問題と本気でお考えですか」

勝子、景時から視線を逸らす。

勝子「それでも」

景時 「尾川殿の思い通りにはなりたくない」と

勝子 「何故それを」

景時 「勝子様の生い立ちはお聞きしました」

勝子、目を丸くして顔を上げる。

勝子 「一体」

勝子、唇を噛む。

勝子 「お鈴か」

景時 「哀れな子です」

勝子 「なんですと」

景時 「要らぬ苦勞を背負いこんでいる。あなたの幼さのせいで」

勝子 「わらわが幼い!？」

勝子、身を乗り出す。

景時 「はい」

景時、勝子の顔をじっと見る。

景時 「通せもしない意地を張り、周りの者に迷惑をかけている」

勝子 「あなたに、何がわかるのです!」

勝子、景時に平手打ちしようとする。景時、それを受け止める。

景時 「わかります」

勝子、景時を睨む。

景時 「私の父」

景時、咳払いする。

景時 「の家臣もそうでした」

勝子 「甲武虎信様の?」

景時、頷く。

景時 「その者の名は霧生景頼」

景時、深呼吸する。

景時 「父の影武者を務めていた男です」

景時、拳をギュッと握る。

230 (回想) 漆襲城・広間・内

甲武虎信(53)が着座の前に座り、その前に山城(44)、秋馬(56)、景頼(32)を含む家臣団がいる。

景時の声「霧生家は甲武に近い親戚筋にあたる一族でした」

家臣団、一斉に平伏する。

景時の声「それ故か景頼に野心が芽生えたそうです」

勝子の声「野心？」

景時の声「同じ血を引く者同士なら己の方が頭領にふさわしいと」

景頼、平伏したまま歯ぎしりをする。

240 (回想) 霧生家の館・玄関・内(朝)

武装した景頼が外へ出ようとしている。景時(12)が玄関の奥から現れる。

景時の声「そして、景頼は謀反を起こしたのです」

景頼、景時の頭を撫でる。景時、笑顔になる。

景時の声「しかし、謀反は速やかに鎮圧されました」

景頼、玄関から出ていく。景時、首を傾げる。

250 (回想) 裏見川・河川敷(朝)

武装した霧生影頼(32)が砂利の上に座っている。霧生の兜には二本の角が生えているが、うち一本が折れている。霧生の側には涙を流す武者が控えている。霧生、小刀を取り出す。

景時の声「景頼は自刃し」

霧生、震えながら息を吸い込んだ後、切腹する。

景時の声「その家族は謀反人の一族という謗りを受けるようになりました」

鮮血が砂利を濡らす。

260 有洲城・渡り廊下

雨が降っている。景時と勝子が並んで中庭を見ている。

勝子「その男の家族というのは」

景時「妻と息子が」

勝子「息子？ならば、死罪に」

景時「いえ」

景時、首を振る。

景時「私が父に助命を願いました」

勝子「雅信様が？」

景時、頷いて目を閉じる。

景時「今では我が臣下として忠誠を誓っております」

勝子「左様で、ございますか」

勝子、腰のあたりで両手を握り合わせる。

勝子「その忠誠はまことのものなのでしょうか」

景時「当然でしょう」

勝子「父の仇を討ちたいとは思わないのでしょうか」

景時「馬鹿なっ」

景時、わざとらしく笑う。

景時「愚かな父親の仇など、討つはずもありません」

景時、渡り廊下の手すりを力強く握る。勝子、首を傾げる。景時、首を振る。

景時「むしろ、親に罪を背負わされたことを恨んでおります」

勝子「まるで己のことに話されますのね」

景時、息を呑む。

景時「その臣下とは兄弟同然でございます故」

勝子「兄弟」

勝子、天を仰ぐ。

勝子「わらわにも兄がおりました。聞いておられますか？」

景時「いえ」

勝子「兄は戦の後、尾川元長に殺されました」

景時「なんと」

勝子「わらわは父上と兄上の仇を討ちとうございます」

景時「勝子様」

勝子「母上もあの男から解放して差し上げたい」

景時、俯く。

勝子「しかし、女の身では何もできません」

勝子、涙を堪える。

勝子「だから、通らぬ意地とわかっていても、わらわは」

景時「それでも、耐えねばならぬのです」

勝子「わらわにはできません！」

勝子、中庭に飛び出す。

景時「勝子様!？」

景時、勝子を追って中庭へ向かう。

270 同・中庭(朝)

土砂降りである。勝子、膝をつき、天を見上げて泣いている。勝子の涙は雨と一緒にたになつて流れている。雅信と瓜二つの顔をした景時が勝子の下にやってくる。景時の化粧が雨で流され始めている。

景時「勝子様!」

景時、勝子の隣に膝をつく。

景時「お体に障ります。戻りましょう」

勝子、景時の顔を見て目を見開く。

勝子「そのお顔は？」

景時、右腕側の袖で顔を隠そうとし、顔の右半分
の化粧を拭ってしまふ。勝子、景時の腕を掴んで
よけ、景時の顔を見る。景時の顔は右半分が素顔、
左半分が雅信と瓜二つとなっている。化粧は以後
も徐々に流れ落ち続ける。

勝子「あなた様、否、そちは何者じゃ」

景時、項垂れる。

景時「甲武雅信様が影武者、霧生景時にございます」

勝子「影武者？霧生？」

勝子、はっと息を呑む。

勝子「かの臣下とはそちのことであつたか」

景時、頷く。勝子、手を地面につけて握る。

勝子「わらわを欺いておったのか」

景時「ご無礼をお許してください」

景時、勝子を真つすぐ見つめる。

景時「我らもまた、勝子様と同じ思い故の所業にございますれば」

勝子「わららと同じとな？」

景時、勝子の下へ進み出ると、その耳元に囁く。

景時「尾川の意のままになりたくはない、と」

勝子「しからは、何故あの男と手を組む」

景時「我が主の悲願達成のため」

勝子「悲願？」

景時「天下統一」

勝子、目を見開いて景時を見る。

景時 「いずれは、尾川も傘下に加えましょうぞ」

景時、勝子と目を合わせる。景時の顔の化粧は完全に流れ落ちている。

景時 「勝子様、甲武へ参られませ」

勝子 「しかし」

景時 「この城は尾川が作りし鳥籠、その中で一人抗ってもさえずりにしかなりませぬ」

勝子、俯く。

景時 「されど」

勝子、景時を見上げる。

景時 「山国の虎、甲武の御内儀ともなればあの男とて無視できませぬ
すまじ」

勝子 「して、どうするというのじゃ」

景時 「共に戦いましょう、あの男の喉笛に食らいつくのです」

勝子、ふっと笑う。

勝子 「影武者とはいえ、和睦の使者とは思えぬ言葉じゃな」

景時 「いや、それは」

景時、勝子から視線を逸らす。

勝子 「じゃが」

景時 「はっ」

景時、勝子を見る。

勝子 「先の説教より余程心に響いたわ」

勝子 「勝子様」

景時と勝子、見つめ合う。雨が止む。

280 同・中庭

勝子と景時が池の畔の石の上に座っている。勝子は口に手を当てて笑っている。景時は雅信と瓜二

つの顔になっている。

勝子 「なんと、クマが」

景時 「まさか人里に、しかも冬に出てくるとは思いませなんだ」

勝子 「げに恐ろしきことよの」

景時 「ええ。それに仕留めた後も」

勝子 「何ぞあったのか？」

景時 「妙に痩せていて不味のなんの」

勝子 「食べたのか!？」

景時 「は、まあ」

勝子 「信じられぬ」

景時 「さほどにおかしいでしょうか」

景時、頭をポリポリと搔く。手紙を持ったお鈴が二人の下に走ってくる。

お鈴 「雅信様!」

景時 「お鈴」

お鈴 「甲武の方から文が」

お鈴、景時に手紙を渡す。景時、手紙を確認する。
勝子、咳払いする。

勝子 「いかがされました？」

景時 「そろそろ帰参せよとのお達しで」

勝子、俯く。

勝子 「左様にございますか」

景時 「勝子様」

勝子 「なんです？」

景時、勝子に近づいて囁く。

景時 「勝子様が某の正体を知ったことは我が主君にも」

勝子 「安心せい、口外はせぬ」

お鈴 「どうかされましたか？」

勝子「何、大したことではない」

景時、立ち上がる。

景時「では、旅支度をせねば」

勝子「お待ちを」

景時、勝子を見つめる。

勝子「もうしばらく、ここにいてもよいのではございませぬか」

景時、勝子を見つめ、目を逸らす。

景時「いえ、甲武の者としてやらねばならぬことがございます故」

勝子、俯く。

景時「また、我が居城にてお会いしましょう」

景時、城内へ向かって歩き始める。景時、自らの

顔を手で覆い、指を突き立てる。

290 漆襲城・外観

城の周りの木々が緑に色づいている。空には入道雲がある。

300 同・虎信の部屋・内

やつれ、顔が黒ずんだ虎信が布団に横になっており、その脇に頭に近い方から雅信、景時の順に座っている。雅信の隣に手紙が置いてある。

虎信「左様か。勝子殿は中々面白きお方のような」

景時、視線を落とす。

景時「きつと、良き奥方になれるでしょう」

虎信「それを聞けて安心したわ」

虎信、深々と溜息をつく。

虎信「そなたを遣わせて、却ってよかったやもしれぬな」

雅信、膝の上で拳を握る。景時、それを見て慌て

て言う。

景時 「ご冗談を」

虎信 「無論冗談よ。雅信」

雅信 「はっ」

虎信 「輿入れは十日後となる、それまでに」

虎信、雅信の隣の手紙に視線を送る。

虎信 「景時の報告をよく読みこんでおけ」

雅信 「はっ」

虎信 「景時が名代であったことを気取られてはならぬ」

景時、虎信と雅信から視線を逸らす。

雅信 「承知つかまりました」

虎信、天井を見つめる。

雅信 「父上？」

虎信 「いや、下がるがよい」

景時 「はっ」

雅信と景時、部屋を出る。虎信、二人が部屋を出

たのを確認して咳きこむ。

310 同・門前・外（夕）

景時が数人の兵士を伴って門の前に立っている。

門外から輿入れの行列がやって来る。籠の中には

婚礼の装束を着た勝子がいる。景時、籠の前に行

き、片膝立ちになる。

景時 「ここよりは某が案内いたします」

景時、頭を下げる。勝子、涙を堪えて景時を見る。

景時 「勝子様？」

勝子、袖で顔を隠して涙を拭う。

勝子 「あいわかった。よろしゅう頼む」

景時「はっ」

景時の先導で、輿入れの行列が門内に入る。

320 同・渡り廊下（夜）

中庭の見える渡り廊下。景時が勝子に先立って歩いている。勝子、立ち止まって中庭を見る。

勝子「以前申しておったな」

景時、勝子を振り返る。

勝子「尾川の城とこの城の庭がよく似ておると」

景時「はい」

勝子「ここは京の崇源寺の庭に似せて作っておるのだろうか？」

景時「そのように聞いております。尾川様の城も？」

勝子、頷く。

勝子「母上の望みでな」

景時「お母上の？」

勝子、頷く。

勝子「かの城で母上が唯一申された我が儘じゃ」

景時「それはまた、何故」

勝子「崇源寺は父と母にとって思い出の地であったそうぞな」

景時「左様で」

勝子、景時に向かって微笑む。

景時「いかがされましたか？」

勝子「かの庭でわらわとそちが出会ったのも縁というものかのう」

景時、勝子から目を逸らす。

景時「某にとつても、使命を果たせた思い出深き地にございます」

勝子、景時を睨む。

勝子「使命？」

景時「勝子様を、この城にお連れするという」

勝子「左様か」

勝子、拳を握る。

勝子「わらわを雅信様の妻にすることがそちの本望か？」

景時、ギョツと目を閉じ、片膝立ちになって頭を下げる。

景時「それが我が使命、忠義にございますれば」

勝子、拳を一層強く握りしめた後、肩を落とす。

勝子「左様か」

景時、立ち上がって勝子に背を向ける。

景時「参りましょう、若がお待ちです」

景時、歩き出す。勝子、今一度中庭を見た後景時を追う。

330 同・御殿・内（夜）

勝子と雅信が並んで座っている。

340 同・中庭（夜）

景時が池の畔の石の上に座っている。

350 同・御殿・内（夜）

勝子と雅信が並んで座っている。二人は盃を口に
する。

360 同・中庭（夜）

景時が池の畔の石の上に座っている。景時の目か
ら涙が一筋流れる。

景時「あ」

景時の手の甲に涙が落ちる。

37〇 同・外観(朝)

城の周囲の木々が紅葉を迎えている。

38〇 同・渡り廊下(朝)

勝子が渡り廊下を歩いている。勝子、中庭の方を見る。中庭の池の畔には景時とお鈴がいる。

39〇 同・中庭(朝)

お鈴が池の鯉に餌をやっている。景時がお鈴の隣に立って腕を組んでいる。勝子、二人の背後から近づいていく。

景時「お鈴よ、どうだ、この城での暮らしには慣れたか？」

お鈴「はい！ですが」

景時「なんだ？」

お鈴「近頃、姫様、いえ、奥様が景時様のお話ばかりで」

勝子、慌ててお鈴に駆け寄る。

勝子「何を申すか！」

お鈴「奥方様！」

勝子「左様なことはあるまい、そちの思い過ぎじゃ」

景時、きよろきよろとお鈴と勝子を見る。

お鈴「いえ！それに今だって」

景時「ん？」

お鈴「せっかく私が景時様とお喋りしていたのに割って入ってくるんですもの」

勝子と景時、顔を見合わせて笑う。

勝子「なんじゃ、焼きもちか」

お鈴「ち、違います！」

景時、お鈴の頭を撫でる。

景時 「また遊んでやる故、奥方様をお許し申し上げよ」
お鈴 「景時様まで」

お鈴、頬を膨らませる。景時と勝子、笑う。

400 同・渡り廊下（朝）

雅信が柱の陰に隠れて中庭を見ている。中庭では
景時、勝子、お鈴が笑いあっている。雅信、唇を
噛む。

410 同・虎信の部屋・内

痩せこけ、黒ずんだ肌の虎信が布団で横になっ
ている。虎信は口を半開きにしている。その脇に景
時が座っている。

景時 「越後から降伏の文が届きましてございます」

虎信 「左様か」

景時 「天下統一の悲願、もうすぐ」

虎信、首を振る。

景時 「御屋形様？」

虎信 「儂はもう長くない」

景時 「何を弱気な！」

虎信 「甲武の天下統一は泡沫と消えるのじゃ」

虎信、ギョツと目を閉じる。

景時 「甲武のと申されるなら雅信様とて」

虎信、景時を睨む。

虎信 「景時よ」

景時 「はっ？」

虎信 「雅信に、天下は獲れるか？」

景時 「きつと！」

虎信、天を仰ぐ。

虎信「あれは優しすぎるのではないか？」

景時「優しさは若の美德です」

虎信「乱世においては必ずしもそうではない」

景時「そんな」

虎信「儂は、あの子を大事に大事にと思ひ」

景時「御屋形様」

虎信「育て方を間違えてしまったのやもしれぬ」

景時「左様なことは、決して左様なことは」

虎信、布団の隙間から力なく手を出す

虎信「雅信、雅信を、頼む」

景時、虎信の手を取ろうとする。虎信、咳きこみ始める。

景時「御屋形様？」

虎信の口から血が溢れる。

景時「御屋形様！」

襖が勢いよく開き、雅信が入ってくる。景時、雅信を見る。

景時「若！」

雅信「父上！」

雅信、虎信に駆け寄る。

雅信「父上！父上！」

景時、立ち上がり、部屋の出口へ向かう。

景時「薬師を呼んでまいります！」

虎信、震える手を天に差し出す。

虎信「天下」

景時、虎信を振り返る。

虎信「我が、手に」

虎信の手がストーンとおろされ、虎信の目が閉じられる。

雅信「父上―！」

雅信、動かなくなった虎信に縋って泣く。景時、呆然とその光景を見る。

420 同・外観

曇天である。城の周囲の木々が葉を落とし始めている。

430 同・広間・内

雅信が着座の間に座っている。その正面に景時、

山城、秋馬を含む家臣団が座っている。山城と秋

馬は隣同士に座っている。雅信、腰を浮かせる。

雅信「尾川殿が、挙兵したと!?」

景時「はっ。そう報告を受けましてございます」

雅信、ドサッと座り直す。雅信、力なく首を振る。

雅信「我らには、同盟が」

山城「端から、先代が亡くなるまでの時間稼ぎだったのでござい
ましよう」

雅信、拳を握る。

雅信「この私なら、容易に打ち倒せると踏んでのことか」

景時「御屋形様」

景時、雅信に手を伸ばしかけ、やめる。

山城「いかががいたしましょう」

雅信、立ち上がる。

雅信「義は我らにあり！尾川を討つ！」

どよめく家臣達。

秋馬 「し、しかし尾川と正面から戦うというのは」

雅信 「籠城戦なら問題あるまい」

秋馬 「籠城？」

雅信、家臣団の向こうへと視線を向ける。

44〇 同・外観

曇天である。城の周囲の木々は葉を落とし始めている。

雅信の声 「我が城は険しい山々に囲まれている。この地に慣れぬ

尾川の兵は自由には動けまい」

45〇 同・広間・内

着座の間で仁王立ちする雅信。その正面に景時、

山城、秋馬を含む家臣団が控えている。山城と秋

馬は隣同士に座っている。

雅信 「そこを我が甲武の騎馬隊で叩く！」

雅信、拳を掌に打ち付ける。どよめく家臣達。秋

馬、山城に耳打ちする。

秋馬 「御屋形様がかように勇猛とは」

山城 「先代が乗り移ったようじゃ」

景時、眉間に皺を寄せる。

雅信 「者共、戦支度をせよ！」

家臣団、鬨の声を挙げる。

雅信 「景時」

景時 「はっ」

雅信 「今田に書状を。援軍を仰げ」

景時 「御意」

景時、一礼して広間を出る。

460 同・外

景時が広間から出て戸を閉める。景時、溜息をついて歩き出す。

勝子の声「景時」

景時が振り返ると勝子がいる。勝子の顔は赤らみ、息が荒い。

景時「奥方様」

景時、勝子の下へ向かうと、勝子を連れて広間の前から去る。

470 同・廊下

景時と勝子に向かい合って立っている。

勝子「あの男と、戦をするのじゃな」

景時、一瞬俯く。

景時「はい」

勝子「あの男のこと、いつかはこうなる定めだったのじゃろう」

勝子、震えて俯く。

景時「申し訳ございませんぬ」

勝子、景時を見上げる。

景時「かような事態になる前になんとかしたかったのですが」

勝子「景時」

勝子、ふらつく。景時、勝子の肩を抱き、その額に手を当てる。

景時「熱い」

勝子、苦笑いする。

勝子「山の冬は慣れぬのでな」

景時「ご安静にしてください」

勝子「戦となればそうもゆかぬじゃろう」

景時 「いえ」

勝子、景時を見つめる。

景時 「奥方様は某がお守り申し上げます故」

景時と勝子、見つめ合う。廊下の曲がり角から雅信がそれを見ている。

480 平野

山に囲まれた平野。遠くに漆襲城が見える。騎馬隊を中心とする甲武軍と、火縄銃を持った兵を中心とする尾川軍とが戦っている。景時は馬に乗って戦いに参加している。甲武軍の一部が城へと逃げ出しつつある。

景時 「退くなー！地の利は我らにある！」

弾が景時の乗る馬に当たる。馬はいなないて暴れだし、景時を振り落とす。景時、背中から地面に落ちて気絶する。

490 同・景時の部屋・内(夕)

景時が布団で横になっている。お鈴がその脇に座り、濡れた手拭いを絞っている。景時、目を開ける。景時の目は虚ろである。

お鈴 「景時様！」

景時 「お鈴か、某は一体」

景時、顔を歪め、背中に手を当てる。

景時 「そうか、馬から落ちて」

お鈴 「三日も寝ておられたのです」

景時、目を見開く。

景時 「三日！？戦はどうなった！？」

お鈴 「今は尾川の軍も攻めてきてはおりませぬ」

景時 「なんだと？何故」

お鈴、ハッと口を開ける。

お鈴 「それが！奥方様が！」

景時 「何があつた！？」

お鈴 「御屋形様が奥方様を人質として館に閉じ込められたのです」

景時 「なんだと」

景時、おののく。

500 同・天守閣・内（夕）

雅信が手紙を手以外の景色を見下ろしている。外では尾川軍が漆襲城を取り囲んでいる。景時が天守閣に入ってくる。

景時 「御屋形様！」

雅信、景時を振り返る。

雅信 「ようやく目覚めたか。心配したぞ」

景時 「奥方様を幽閉したというのはまことですか！？」

雅信、顔をしかめる。

雅信 「ああ」

景時 「何故左様にむごいことを」

雅信、手紙に視線を落とす。

景時 「その書状は？」

雅信 「挙兵の報を受けてほどなくして、尾川から届いたのだ」

景時 「左様なものがあつたとは、知りませなんだ」

雅信 「勝子を引き渡し、降伏すれば甲武の存続は許すと」

景時 「なんですと」

雅信 「勝子の母は藤原氏に連なる名家の出と聞く」

雅信、尾川軍を見下ろす。

雅信 「上洛を目前とし、その血筋を利用したくなったようだな」

景時 「今からでも遅くはありません！尾川の提案を」

雅信 「その必要はない！」

雅信、手紙を握りつぶすと景時に向き直る。

雅信 「もうじき大雪が降り始める」

景時 「はっ？」

雅信 「さすれば、今度こそ我らが圧倒的に有利となろう」

景時 「それまでこの城はもちますまい」

雅信 「もたせてみせるのだ」

景時 「城だけではありません、奥方様も」

雅信 「勝子か」

景時 「奥方様は病の身、幽閉生活には耐えられませぬ」

雅信、景時に背を向ける。

雅信 「あれも武家の女だ。覚悟はしておろう」

景時 「御屋形様！」

景時、雅信の肩を掴んで自分の方へ振り向かせる。

雅信 「そなたは！」

雅信、景時の腕をつかむ。

雅信 「甲武の家と勝子、どちらをとるといふのだ！」

景時 「そんな」

雅信 「私は甲武の頭領として、この戦勝たねばならぬのだ」

雅信、両手を上げて拳を握る。

雅信 「そして必ずや、天下統一を」

景時、雅信に背を向けて天守閣を去る。

510 同・渡り廊下（夕）

中庭が見える渡り廊下。景時、中庭の池のあたりを見つめながら、手すりを握っている。景時、手

すりを強く握る。手すりに亀裂が入る。景時、渡り廊下を去る。

520 同・双葉の館・内（夜）

真赤な顔で息の荒い勝子が柱にもたれかかっている。

見張りの声「御屋形様！どうぞお入りください」

雅信と瓜二つの顔をした景時が入ってくる。勝子、身を強張らせる。景時、戸を閉めて勝子に近づく。

景時「奥方様、某です。霧生景時です」

勝子「なんじやと？」

景時、勝子の前で片膝立ちになる。勝子、景時の顔に触れて微笑する。

勝子「なんと、懐かしきものよ」

景時、目をギュッと閉じ、勝子を真つすぐ見る。

景時「至急、ここを出しましょう」

勝子「何？」

景時「尾川へも話を通しております」

勝子「なんじやと、しかし」

勝子、唾を飲み込む。

勝子「そちは、それでよいのか」

景時「決心の上です」

景時、勝子の手を引いて立ち上がらせる。

530 同・裏門・内（夜）

景時が勝子の手を引いて歩いている。

景時「某が最も信頼する者を待機させております」

勝子「左様か」

景時 「その者の手引きで、尾川の陣まで向かう手筈にございます」
景時、裏門の戸を開ける。

54〇 同・裏門・外（夜）

暗闇の中、全身に矢を受けた兵が立っている。雅信と瓜二つの顔をした景時、そして勝子が戸をあけて出てくる。

景時 「門次郎、待たせたな」

景時、首を傾げる。

景時 「門次郎？」

雲間からの月明かりが兵を照らす。景時、息を呑む。勝子、小さく悲鳴を上げる。

雅信の声 「景時」

藪の中から弓兵らが出てくる。弓兵らは景時に向かって矢をつがえる。景時、刀に手を掛ける。藪の中から雅信が出てくる。

景時 「御屋形様」

雅信 「所詮は謀反人の子ということか」

景時、刀から手を離し、俯く。

55〇 同・双葉の館・内（夜）

全身痣だらけの景時が倒れている。雅信がそれを見下ろしている。雅信の周りに兵達がいる。室内には大きな燭台が一つある。

雅信 「もうよい、そなたらは下がれ」

兵達、館を去る。

雅信 「ここで、そなたの命を救ったな」

景時、雅信を見上げる。

雅信 「その恩を仇で返されるとは思わなんだ。とんだ不忠者よ」

景時 「主君の命に唯々諾々と従うことは忠義にあらず」

雅信 「ほう」

景時 「主君の過ちを諫めるもまた忠義にございます」

雅信 「私の過ちだと」

景時 「奥方様を犠牲にしてまで勝てぬ戦に挑み、何が残りますか」

雅信、拳を握る。

景時 「降伏いたしましょう」

雅信 「降伏だと？」

景時 「甲武の家を残す、それが今我らにできることです」

雅信、拳をますます強く握る。

景時 「御屋形様」

雅信 「ならぬ」

景時 「何故」

雅信 「それでは天下は獲れぬ」

景時、首を振る。

景時 「もう、仕方のなきことです」

雅信 「ならぬ。ならぬならぬ！」

景時 「御屋形様」

景時、よろよると立ち上がる。

景時 「この乱世を生き抜く、それだけでも」

景時、雅信に手を伸ばす。雅信、景時の手を払い

のける。

雅信 「それでは私には何も残らぬ！」

景時 「御屋形様？」

雅信 「父には育て方を間違ったと言われ！」

景時 「聞いておられたのですか」

雅信 「妻の心は影武者に奪われ」

景時、ひゅっと息を吸う。

景時「それは」

雅信「私にはもう天下しか、天下統一しか残されておらぬのだ！」

雅信、跪いて泣く。景時、その隣に膝をつく。

景時「御屋形様、申し訳」

雅信「やめろ！」

雅信、景時を睨む。

雅信「私を、憐れむな」

景時、俯く。戸越しに伝令の声が聞こえてくる。

伝令の声「ご注進！」

景時「なんだ？」

伝令の声「尾川の勢力、進軍を再開いたしました！」

景時と雅信、息を呑む。

景時「最早、奥方様の命すら待てぬというのか」

雅信「そうか、そうだったか」

雅信、笑いだす。景時、雅信を見つめる。

雅信「天下もまた、最初から我が鼻先にすらなかったか」

景時、雅信に手を伸ばそうとしてやめ、館内を見

渡す。景時、両頬をパンと叩く。

景時「御屋形様！」

景時、片膝立ちになる。

景時「霧生景時、最後のご奉公をいたしたく存じます」

雅信、笑うのをやめて景時を見る。

景時「どうか奥方様と共に落ち延びてください」

雅信「なんだと？」

景時「時間は某が稼ぎます故」

雅信「無駄だ。そなたを討てば、次は私に追手を向けるだけぞ」

景時「首を獲った相手に追手は差し向けますまい」

雅信 「どういうことだ」

景時 「某が御屋形様に化け、この首を獲らせます」

雅信、目を見開く。

雅信 「私に代わり、命を捨てるというのか」

景時 「それが、影武者の本分にございますれば」

雅信、立ち上がり、景時の前に行く。

雅信 「今の私に、なお命を捨てる価値があると思うか？」

景時、立ち上がる。

景時 「わかりませぬ」

雅信 「わからぬだと？」

景時 「価値故に忠を尽くしたことなど、ございませぬ故」

雅信 「しからは、何故」

景時 「ただ、そうしたいと望んだばかりにて」

雅信 「そう、したい？」

景時 「御屋形様は、我が兄にございますから」

雅信 「兄故に、と？」

景時 「他に理由はございませぬ。ずっと、そうでした」

雅信の目が潤む。雅信、景時に歩み寄る。二人の

影が重なり合う。

勝子の声 「だめじゃ！」

勝子が戸を開けて入ってくる。景時、立ち上がる。

雅信、涙を拭いて立ち上がる。

景時 「奥方様」

勝子 「そちが死ぬなら、わらわも」

景時 「なりませぬ！」

勝子 「何故じゃ！」

景時 「某は、御屋形様にも、勝子様にも生きていてほしいのです」

勝子、泣きじやくりながら景時の胸に顔を埋める。

雅信、それを見て深呼吸する。

雅信「景時よ」

景時と勝子、雅信を見る。

景時「はっ」

雅信「そなたの献策、見事なものだ」

勝子、声もなく首を振る。

景時「お褒めに預かり光栄にございます」

雅信「ただ一点、改めるべき箇所がある」

景時「それは、いかなる」

雅信「尾川に首を差し出すはそなたではない、私だ」

景時「な、なにを仰せですか!？」

雅信「我が夢は破れた、最早この世に未練はない」

景時「しかし、甲武の血が途絶えてしまいます」

雅信「甲武家と霧生家、元は一つの武家であつたらう?」

景時「はっ」

雅信「しからばそなたが生きておれば甲武の血が残るも同じよ」

景時「されど、甲武の名がなければ従わぬ者達も」

雅信「それについては考えがある。それに」

景時「はっ?」

雅信「弟を守るは、兄の務めぞ」

景時「そんな、某は」

雅信「景時!」

雅信、微笑んで力なく首を振る。

雅信「もう、よいのだ」

景時「御屋形様」

景時、俯いて拳を握る。雅信、背筋を伸ばす。

雅信「甲武雅信、最後の命ぞ。心して聞け」

景時、雅信を見る。

景時「はっ」

雅信「本日只今より、そなたが甲武雅信となれ」

景時、震えながら片膝立ちになる。

景時「御意」

景時、頭を下げ、唇を噛み締める。雅信、頷く。

560 平野（夜）

漆襲城に向けて進む尾川軍。尾川がその中程で馬に乗って進んでいる。暗闇の中から雅信が率いる甲武軍の騎馬隊が突撃してくる。尾川、ニヤリと笑う。

尾川「迎えて撃て！甲武の首を獲るのだ！」

尾川軍、甲武軍に向けて火縄銃を構える。

570 山道（夜）

景時と勝子、お鈴が山道をいそいそと歩いている。三人の周りには数名の兵士がいる。三人の後方から関の声が聞こえてくる。景時、後ろを振り返る。

お鈴「（小声で）景時様、早く！」

景時、再び歩き出す。

580 平野（夜）

火縄銃を撃ちまくる尾川軍。甲武軍は次々と撃たれ、倒れている。尾川は尾川軍の中程からその様子を見ている。馬上の雅信が尾川に向かって進んでいく。

雅信「尾川、元長あ！」

雅信の額に銃弾が命中する。

590 山道（夜）

景時と勝子、お鈴が山道をいそいそと歩いている。三人の周りには数名の兵士がいる。景時の目に涙がにじむ。

600 平野（夜）

額に弾痕がある景時雅信が虚ろな表情で馬に乗っている。周辺に尾川軍の歩兵達がいる。雅信の体が傾き、馬から落ちる。尾川軍の歩兵が雅信のところへわつと集まる。

610 山道（夜）

景時と勝子、お鈴が山道を歩いている。三人の周りには数名の兵士がいる。景時、嗚咽する。勝子、その腕を強く抱きしめ、歩かせる。

620 平野（夜）

雅信の首なし死体の周りに尾川軍の歩兵が集まっている。歩兵の一人が額に弾痕のある雅信の首を持って掲げる。

630 長林寺・外観

山奥にある寺院。

640 同・墓地

勝子（59）と甲武雅時（32）が、「吾兄之墓」と刻まれた墓の前で合掌している。墓の前には小さな壺が置かれている。雅時、肩の力を抜く。

勝子「大儀であつたな、雅時」

雅時「あ、いえ、申し訳ございませぬ」

勝子「急な葬儀であつた故、疲れたじやろう？」

雅時「いえ、母上こそ」

勝子「父を許せよ」

雅時「はっ？」

勝子「藩主の座をそちえに譲り、気が緩んだのじやろうて」

勝子、壺を優しくなでる。

雅時「しかし父上も妙なご遺言を」

勝子「ん？」

雅時「喉仏のみとはいえ、かような辺境の寺に納めよとは」

勝子「ここには」

勝子、墓を見る。

勝子「あの方の大切な人が眠っておる故な」

雅信、墓を見る。

雅時「父上にご兄弟がおられたとは」

勝子、くすくすと笑う。

雅時「母上？」

勝子「まあ、そんなところじやな」

雅時、首を傾げる。

勝子「さあ、城に帰ろう」

雅時「はっ」

雅時、墓に背を向けて歩き出す。勝子、墓と壺を見つめる。雅時、勝子を振り返る。

雅時「母上？」

勝子、雅時の方を向く

勝子「すまぬな。今参る」

勝子、墓と壺を一瞥した後雅時を追う。

t a i c h i . e z u u @ s m a i l . c o m

江連 泰知